

<b>Title</b>	キャンパスにおける礼拝、その充実：チャペル完成を目前にして
<b>Author(s)</b>	瀬名, 浩一
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学：論集, Volume20, 2005.3：123-126
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3227">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3227</a>
<b>Rights</b>	


 The logo for SERVE features the word "SERVE" in a serif font. The letter "V" is replaced by a stylized checkmark symbol. The letter "E" at the end is partially enclosed by a square box.

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## キャンパスにおける礼拝、その充実

——チャペル完成を目前にして——

### 一、チャペルに神は住まわれるか

キリスト教大学にとってチャペル礼拝の場が整えられることは、大学設立以来の神との約束が果たされることであり大きな喜びである。しかし、完成するチャペルに我々が求める神は常に住まわれるのであろうか？

出エジプト記によれば、神が出現されれば、その場所はいまや聖なる場所になるという。自然的秩序の一部に過ぎぬものが、神の特別の使用のために切断されて聖化されるからである。場所の性質が変化すれば私どもは履物を脱いで敬意を示す習慣に従うよう求められる。また、マタイの福音書でもイエスは神聖であるべき「祈りの家」が市場として使われたことを怒り、その場所で取引をしていた者を追い出したとあり、チャペルはあくまで聖別されるべき場所と考えられる。また神殿を持つがゆえの罪に注意せよとホセア書は言う。私たちが願うような好都合な神がそこに住み、無病息災、商売繁盛を約束してくれれば心強いかもしれないが、そのような偶像礼拝に陥るなど戒められる。私達が真に神を求め祈りをあわせるときのみ、神は臨在される。

瀬名 浩 一

大事なことは、チャペルで礼拝するからといって、其処に神が臨在することを保障されるわけではないということである。神殿に住まわれぬ神は、その全き自由ゆえに、どこでも自由に祈りを聞いて下さる。神の自由は、自分達の祈りの自由をも意味する。そしてチャペルで祈る者達は、神が与えてくださる賜物が何よりも自由と平安であることを味わうことが出来るのである。

## 二、信仰問答

チャペルでの礼拝を一層充実するためには何が求められているのであろうか？

礼拝は、教師だけでは成立しない。其処に熱心に、真剣にキリスト者であろうとする学生がいなければならぬ。正しい信仰の理解を持ち、告白をして、礼拝の共同体を形作る学生達を育てなければならぬ。

宗教改革者ルターは使徒信条、主の祈り、十戒の三要文をわかりやすく簡潔で平易に解説した「小教理問答」を書いていっている。ルターが試みたことで特に注目されるべきはこれまでのように口頭でそれらの文章を暗誦することを教えただけでなく、それについて問答をするように指示していることである。信仰の言葉の意味を理解することを重視したからである。礼拝共同体を形作る者たちに、主体的、自覚的に信仰を言い表すことを求めたのである。このような問答体による教育を受けたのは一〇歳から一二歳ぐらいまでの子供達そうで、恐らく子供は最初教えられるままに唱えるだけであろうが、いつしかそれが自分にとってかけがえのない言葉に変わるのである。何より具体的な生活の中での信仰の告白の言葉として理解されるのである。

生活の中での信仰告白といえば、フランスのカトリックの司祭で青少年指導をしたミシエル・クオストも勧めて

いる。彼は、『神の声を聴くすべを知っているなら』という本の中で、「生活に目をとめさえすれば、生活のすべてがしるしとなり、生活のすべてが祈りとなる」と以下のように述べている。

「神がごらんになるように生活に目をとめる事を知ってさえすれば、この世の中には何も俗っぽいものはないことがわかる。むしろ何もかも御国をたてるために役立つことがわかる。信仰を持つということは、何も目をあげて神に思いをはせるだけではなく、キリストの目をもって、この世に目を注ぐことでもある。キリストをして我々の全存在にしみこませ、我々の瞳を清めるなら、この世はもはや、妨げにならない。むしろキリストによつて御国が天になるごとく地にもなるために、父のために働くことへのたえざる招きとなる。我々は、人生に目をとめることを知るに足る信仰を祈り求めねばならない」。

先日二泊三日でキリスト教八王子合宿に参加したが、デイスカッションといい、証といい見事なものであった。参加した学生たちの熱心さ、真剣さに感心した。帰つて合宿のことを思い出しつつ、この発題をまとめているとき、もしあの場で信仰について簡潔なテキストがあればさらに良かったのではないかと思わされたのである。

### 三、リーダーが負うべきものを教える

「年頭教書(一一三頁以下)で問われた「市民社会の良き担い手を育成する」ためには、チャペルで、どのような礼拝を行うべきであろうか? そもそも日本において市民社会は成熟しているのでしょうか? 最近、裁判員制度の発足など市民社会の成熟を前提とした制度改革が進んでいるが、その担い手として期待される市民の社会的行動力、倫理的判断力はどこで訓練されるのでしょうか?」

私は、教会の中でも「大学における教会」こそ、市民社会の担い手を育てることができないのではないかと思うのである。日本では市民社会が成熟していない分、担い手を教え、訓練する上でリーダーが負うべきものが大きいように私は考える。「大学における教会」には、教員というリーダーにも増して、イエス・キリストという「リーダーの中のリーダー」が臨在され、教員が負いきれない荷物も引き受けてくださっているからである。ホープ大学の理事長であったマックス・デュブリー氏によればリーダーとは、人々がついていく、あるいは人々がついていってもいいという人々からリーダーシップという贈り物を授かったひとなのである。従ってリーダーは組織に対しある種の資産について借りを負っている。これらの資産を用いてメンバーの持つ才能や可能性を理解し、それぞれの者が成果をあげられるよう自由裁量権を与えるのがリーダーの役割なのである。そのような調和無しには組織の目標を達成することは出来ない。このような一体化を生み出すのは組織内の個々人ではなく、リーダーの責務なのである。

「大学における教会」は、このようにして地域社会で求められるリーダーシップに答えるかを訓練する場として考えることができるのではないだろうか。

#### 参考文献

鎌倉雪ノ下教会長老会編『神の民の家・祈りの家をここに建て』日本基督教団鎌倉雪ノ下教会、一九八五年

加藤常昭『雪ノ下カテキズム 鎌倉雪ノ下教会教理・信仰問答』教文館、一九九〇年

P・F・ドラッカー『非営利組織の経営』ダイヤモンド社、一九九一年